

考古学研究会第64回総会研究集会報告（下）

狩猟採集社会における戦争

— 集団間の暴力を促進／抑制する要因について考える —

松 本 直 子

## 狩猟採集社会における戦争

— 集団間の暴力を促進／抑制する要因について考える —

松本直子

**要旨** 本報告では、戦争の起源や要因をめぐる錯綜した研究状況を整理し、考古学的に確認される事象を踏まえて、戦争を促進する要因、抑制する要因について検討する。戦争は、偏狭な利他主義、集団ないしリーダーへの忠誠、権威に対する従順さといった道徳的規範を土台として展開する社会行動である。暴力的な攻撃は人間以外の動物にも広く見られるが、戦争をするのが人間だけなのは、人間だけが道徳を持つからである。戦争の起源は人類史の初源に遡るとする説が台頭しているが、体系的な受傷人骨データを見ると先史時代の狩猟採集社会で戦争が頻発していたとは考えられない。狩猟採集社会においては、平等主義、分配の重視、自主性の尊重、そして血縁関係を越えた相互扶助や寛大さの尊重という道徳的規範が、それを共有する人々の相互監視と評判の力によって保持されており、それに基づく文化的システムが権力の集中化と集団間の暴力を抑制する。こうした文化的・認知的傾向は、親族関係を越えて平和的な関係を取り結ぶことが適応的であったために、先史時代の遊動的狩猟採集社会において進化したと考えられる。

**キーワード**：戦争の起源、平等主義、権力、偏狭な利他性、ジェンダー

### はじめに

人類学や考古学の成果に基づいて、1990年代半ばまでは、狩猟採集社会では戦争は稀であり、農耕の開始による人口増加、土地や水の争奪、社会の複雑化などによって戦争が始まったとする見方が主流であった。日本考古学においても、対人用の武器や防御的な集落などの考古学的な証拠が現れるのが弥生時代であることから、農耕社会になって初めて戦争が起きたとする見方が主流であった(佐原1986・1999・2005)。

しかし近年、むしろ文明や国家が発達する以前の社会は暴力的であり、国家の成立によって戦争は減少しているとする見方が台頭してきた。平和で豊かな狩猟採集民というイメージはイデオロギー的な幻想であり、実態はむしろ戦争の世紀と呼ばれる20世紀よりも戦死者の比率が高かったとする説が複数の研究者によって唱えられ、世界は国家による統制により平和になってきているという主張が多く見られるようになった(Keeley 1996, ガット2012, ピンカー2015)。さらに、頻繁な戦争状態がヒトの特性である利他的な性質の進化を促したとする説も出されている(Bowles 2009)。その根拠として、遺跡出土人骨における受傷率及び民族誌に見られる暴力による死亡率がともに14%程度とかなり高いというデータが用いられている。戦争を人間の本

性と考える立場は一般的にも根強い。2016年5月にアメリカ合衆国大統領として初めて広島を訪れたバラク・オバマ大統領は、原爆ドームを背景に行ったスピーチの中で、集団間の暴力的な衝突である戦争は支配や征服への本能的な欲求に根ざしたもので、人類の歴史とともに始まったと述べた。

こうした主張は、日本考古学における従来の認識とは大きく異なっている。実際にこれまで報告されている人骨データにおける受傷率を調べると、縄文時代で約1%、弥生時代でも3%程度である (Nakao et al. 2016, Nakagawa et al. 2017)。出土人骨において確認される受傷率は遺存状況等のバイアスが大きく、実際の暴力死の割合を反映しているとは言えないため、その解釈は慎重に行う必要があるが、考古学的に確認される資料において受傷率にかなりのばらつきがあることは確かである。

本報告では、このような戦争の起源や要因をめぐる錯綜した研究状況を整理し、考古学的に確認される事象を踏まえて、戦争を促進する要因、抑制する要因について検討する。

## 1. 戦争の定義

戦争が人類社会において普遍的であるか、人間の本性に根差すものであるか、という問題に関する意見の対立は、何をもちいて戦争とするかという定義が研究者によって異なっていることにも起因している。たとえば、ボウルズやピンカーが依拠している考古学的、民族誌的データでは暴力的に殺害されたとみられる個体数をすべて「戦争による死者」としてカウントしている。しかし、そこにはさまざまな種類の暴力が含まれているはずである。

19世紀から20世紀にかけての戦争を対象に、その要因を科学的に分析しようとしたデヴィッド・シンガーとメルヴィン・スモールによる古典的な著書では、戦争は複数の組織的軍隊の間の持続的な戦いを含む暴力的衝突で、1年間に1,000人以上の戦死者がでるものと定義されている (Singer and Small 1972)。この定義を人口規模が異なる先史時代にもそのまま遡らせることは適切でないかもしれないが、「組織的軍隊の間の持続的な戦いを含む暴力的衝突」という部分については、佐原真が考古学的に戦争を考える際の指標と基本的に一致している。少し異なる視点からは、ある社会組織が他の社会組織を服従させることを目的とした暴力を伴う長期的軍事衝突で、大きな社会変化をもたらすものとするもの (Malešević 2017)、単なる攻撃性や暴力とは異なり、社会的慣習 (統制された集団行動、階層的分業、自己規律、組織への追従、そのための体系的技術開発) として存在するもの (Malešević 2018) とする定義がある。

戦争は多数の殺傷を伴うような集団間の武力衝突であり、個人的な殺人や暴力とは区別して考える必要がある。ヒトに暴力的な性質があり、殺人や暴行などの行為に及ぶことがあるとしても、それが戦争に直結するわけではない。ほとんどの社会で殺人は悪いことであり処罰の対象である。身内を殺された人に復讐を認められる社会もあるが、戦争では自分や自分の親族に対して直接危害を加えた相手とは限らない敵を殺すことが賞賛される (Kelly 2000)。対象とする人の帰属によって、同じ行為に全く異なる評価が与えられるためには、人を帰属集団によって明確に区分し、それに応じて全く異なる対応をとることを是とする独特の認知システムに根差した社会的関係性があると考えられる。自集団のメンバーのためには自分を犠牲にするような利他的行動をとるが、他集団のメンバーに対しては全くそうした行動をとらず、むしろ攻撃

したりするような行動は、「偏狭な利他性」と呼ばれる。戦争は、人間が持つ偏狭な利他性と密接に関わる行為である。

## 2. 戦争と道徳、権力の関係

通常は処罰の対象となる殺人という行為が、戦争という状況下では賞賛されること、戦争に参加しない人に対して自集団の仲間から非難や攻撃が起こることを考えると、戦争が単なる暴力とは異なることがよく分かる。戦争は、偏狭な利他行動の賞賛、集団ないしリーダーへの忠誠、権威に対する従順さといった道徳的規範を土台として展開する社会行動である。暴力的な攻撃は人間以外の動物にも広く見られるが、戦争をするのが人間だけなのは、人間だけが道徳を持つからである。

道徳的とされる行動や規範には文化による多様性があるが、決して完全に相対的なわけではなく、人類の進化の過程で形成されてきた心理的傾向に根差しているとする研究が近年注目されている。2012年に相次いで出版されたクリストファー・ボームとジョナサン・ハイトの研究を基に、道徳の起源と性質、権力及び戦争との関係について検討してみよう。

何が道徳的であるかについては社会によって多様であるとともに、同じ社会に属する人の中にもさまざまな考え方の違いや対立がある。ジョナサン・ハイトは、道徳には互いに垂直に交わるいくつかの軸があるために相互に矛盾するような様相が現れるのであり、多元主義的に理解すべきであって相対主義に陥る必要はないとしている (Haidt 2012)。

ハイトが道徳の次元として挙げているのは、次の5つである。

ケア／危害 公正／欺瞞 忠誠／背信 権威／転覆 神聖／墮落

これらの次元は、人類が進化する過程で適応的な行動がとれるような認知的システムとして発達してきたと考えられている。たとえば、ケアをすることが良いことで、危害をあたえることは悪いことであると考えすることは、子どもを養育する上で必要とされる性質である。公正／欺瞞の次元は、互恵的な協力関係を築くのに必要とされる。忠誠／背信の次元は、強力な連合を形成することに関わる。権威／転覆の次元は、社会的階層が存在する中で有利に立ち回ることに関わる。そして、神聖／墮落の次元は、おそらく汚染や感染を避ける行動に起源を持つと考えられる。いろいろなものを食べる雑食性の人類にとっては、新奇性を好む性質がある方が新しい資源を利用できるが、そこにはリスクも伴うため、新奇なものを恐れる傾向も共存している。そうした状況でリスク判断に関わるものとして、汚染恐怖という行動免疫が進化した可能性がある。

こうした考え方は、私たち現代人が備えている心理メカニズムの多くが、進化の過程で適応的であったために広く種内に広がったとみる進化心理学的研究に基づいている。進化心理学では、私たちの心を生み出す脳の基本的構造は、先史時代の大半を占める狩猟採集社会における経験と淘汰圧によって形成されたと考えられている (Barkow, Cosmides and Tooby 1992, Tooby and Cosmides 2005)。しかし、定住・集住、農耕の開始、社会の複雑化や技術発展によって、人間をとりまく状況は大きく変化したため、進化環境において対処すべきであった課題と、現代社会におけるそれとは大きく異なってきている。

ハイトが示す5つの道徳次元のうち、ケア／危害と公正／欺瞞、そして神聖／墮落は、遊動

的な狩猟採集社会において適応的な心理メカニズムを構成するものであると言えよう。忠誠／背信と権威／転覆については、おそらく原初的なものの発生は人類と他の類人猿との共通祖先まで遡る可能性がある。チンパンジー、ボノボ、ゴリラには、アルファ雄が序列のトップに位置するという共通した傾向があり、人間社会においてもしばしば同様の構造が見られる。しかしながら、これらの類人猿においても、支配されることを常に甘んじて受け入れるわけではなく、支配者があまりに横暴な場合には服従者が集団で攻撃することが知られている（ボーム 2014, pp.182-184）。あまりに支配的で乱暴なアルファ雄に、数頭の雌が集団で襲いかかって、時には殺してしまうほど激しく噛みつくようなケースは、ボノボでもチンパンジーでもしばしば観察されている。こうした行動について、霊長類学者のフランス・ドゥ・ヴァールは、コミュニティの利益を損なう恐れのある攻撃的な行動をコントロールするためのものと位置付けている（ドゥ・ヴァール1998）。つまり、社会的序列に従うという行動と、たとえ序列が上の個体でも、コミュニティの利益を損なうような乱暴な行動に対する排除行動とは、人類と類人猿の共通祖先からセットで持っていた可能性が高い。

ハイトは、現代社会において、人々がなぜリベラルと保守という対立的な政治的立場に分かれるのか、という問題について考察している。その理由が、重視する道德次元の違いではないかと考えるのである。リベラル派が重視するのはケアと公正であり、他人に危害を加えないこと、社会的な平等を達成することが重要とされる。それに対して保守派は、忠誠、権威、神聖の次元を重視し、個人より共同体を優先する倫理、神聖なものに敬意を払うことが重要とされる。保守派が公正の次元を全く評価しないわけではないが、リベラル派とは公正さの捉え方が異なっている。リベラル派にとっての公正が誰からも自由を抑制されないこと、平等な権利を持つことであるのに対し、保守派は個人の資質や行動に応じた比例配分、自己責任や因果応報という視点で公正さを判断する<sup>1)</sup>。この視点の違いを明確に示すには、自由／抑圧という次元を加えて考えるとよい。

互いに垂直に交わるとされる5つの道德次元であるが、権力という視点から見ると、公正／欺瞞の次元と、忠誠／背徳、権威／転覆の次元の間に大きな違いがある。後者は、社会の一部のメンバーが権力を持つことを前提としているのに対して、前者はそうではない。

溝口孝司は、権力を定義する1つの軸として、A) 法規範的強制力、あるいはB) 行為の選択の他律的もしくは自律的操作として認識する軸があり、また別の軸として、X) 自由の制限、あるいはY) 行動の動機づけの新たな可能性を生み出すものとして定義する軸があると整理している（溝口1999）。このうち、A-Y象限に定位される権力認識が、従来考古学において国家形成や戦争の発生を論じる際の視座であった。このタイプの権力が、忠誠や権威、神聖に関する道德的観念と相互に強化しあうことによって、それまででない新しい秩序を構築し、維持する動因となる。一方、B-X象限に定位される権力は、社会を構成する人々の間に行動選択に関する相互予期という形で遍在しており、「平等主義的部族社会体」においてもある種の行動を制約する「自由の制限」としての力を持っている。

このように考えると、平等主義社会と階層化社会は権力の有無によって分かれたるのではなく、権力の性質と働き方が異なっているということになる。そしてこの権力の働き方の違いは、社会において重視される道德次元と密接に関連している。公正を重視する平等主義社会では、

個人の自由が尊重されるが、個人間に格差が生じることを押さえ込む強力なB-Xタイプの権力が働いている。人よりも多くの食料を手に入れようとすることや、狩りで大きな獲物を獲った人がそのことを自慢することは、非難や嘲笑の対象となる。特に、「大物ぶった」振る舞いや支配的な行動は、他者の個人的な自主性を脅かすもの、すなわち社会を脅かすものとして非難される。そうした逸脱的行動は、通常は嘲笑する、悪く言う、仲間外れにするなどの、身体的暴力によらない社会的圧力によって押さえ込まれるため、集団による「死刑」にまで至ることは稀である (Wiessner 2005)。

### 3. 狩猟採集民は戦争をするのか

先史時代の狩猟採集民にも戦争があったことを示す確実な証拠として、スーダンのジェベル・サハバという遺跡がある<sup>2)</sup>。およそ13,000年前の墓地で59体の人骨が出土し、そのうち24体に暴力的に殺害された痕跡が確認されている。女性と子供も殺害されていることから、集団間の対立があり、他集団の間であれば、性別年齢を問わず殺戮の対象とするという規範があったことを示す。また、治癒痕跡も見られることから、長期にわたり暴力的対立が繰り返されたことが分かる (Friedman 2014)。アフリカのナイル川流域における13,000年前から10,000年前ごろの遺跡で受傷人骨の比率が高い傾向があるのは、乾燥地帯で河川流域に資源が集中しているため、分布が限られた資源を奪い合う状況が起き易いことによるとみられる。氷期の最終段階の急激な気候変動による環境変化で、資源の状態が良い時に増加した人口が、資源が減少して食料不足に直面する事態が生じたことが、集団間の暴力的対立の原因となった可能性が高い。

戦争による死亡率平均14%の産出の根拠としてピンカーが用いている先史時代のデータは、時代も地域もさまざまな21か所の遺跡から得られたものであり、東アジアのデータはおそらく英語であまり公表されていないため全く使われていない (図1)。また、民族誌における戦争による死亡率についても、やはり平均14%程度と算出されているが、民族誌に基づくデータは、たとえば狩猟採集民のものとして示されているが、さまざまな形で農耕社会との接触があるケースがほとんどであり、先史時代の狩猟採集社会と同等に扱うことはできない。狩猟採集民が頻繁に戦争をするという主張の根拠とされるデータに偏りがあるという批判はすでになされており (Fry 2013, Fry and Söderberg 2013)、より体系的・網羅的なデータによって検証することが求められている。

そこで、日本列島の縄文時代と弥生時代の遺跡から出土した人骨について、これまで報告されている資料を網羅的に集めて受傷人骨の比率を計算すると、表1のようになる。草創期については人骨が出土していないが、早期から晩期にかけて2,576体の人骨があり、暴力による受傷例は23体で、その比率は0.9%、母数を大人の1,275人に限定しても1.8%であった (Nakao et al. 2016)。受傷人骨出土遺跡は散在しているが、太平洋沿岸に多いのは貝塚の分布を反映しているとみられる (図2)。遺跡における内訳を見ると、伊川津貝塚で7体、へぎ洞穴で4体見られる他は1遺跡から1、2体の出土であり、明らかな大量殺戮を示すような状況はみられない (表2)。受傷人骨の中に子どもは含まれていないことも、集団間の戦争があった可能性は極めて低いことを示している。出土人骨数が10体以上の遺跡について見ると、<sup>へぎ</sup>洞穴が22.2%と高めである他は3.0~8.4%となる。この数値は、確かに現代社会の基準と比べると高いが、ボウルズら

が算出した14%という数値よりは低い (Bowles 2009)。

ここで注目したいのは、縄文時代が決して長期にわたって安定した均質な社会ではなかったことである。縄文時代の草創期から早期にかけては、基本的に小規模な集団による遊動的狩猟採集社会であり、人口密度も低かったが、前期から中期にかけては東日本で遺跡の数・規模が拡大する。狩猟採集民としては高い人口密度と定住的な生活様式が成立し (谷口2003), 豆類の

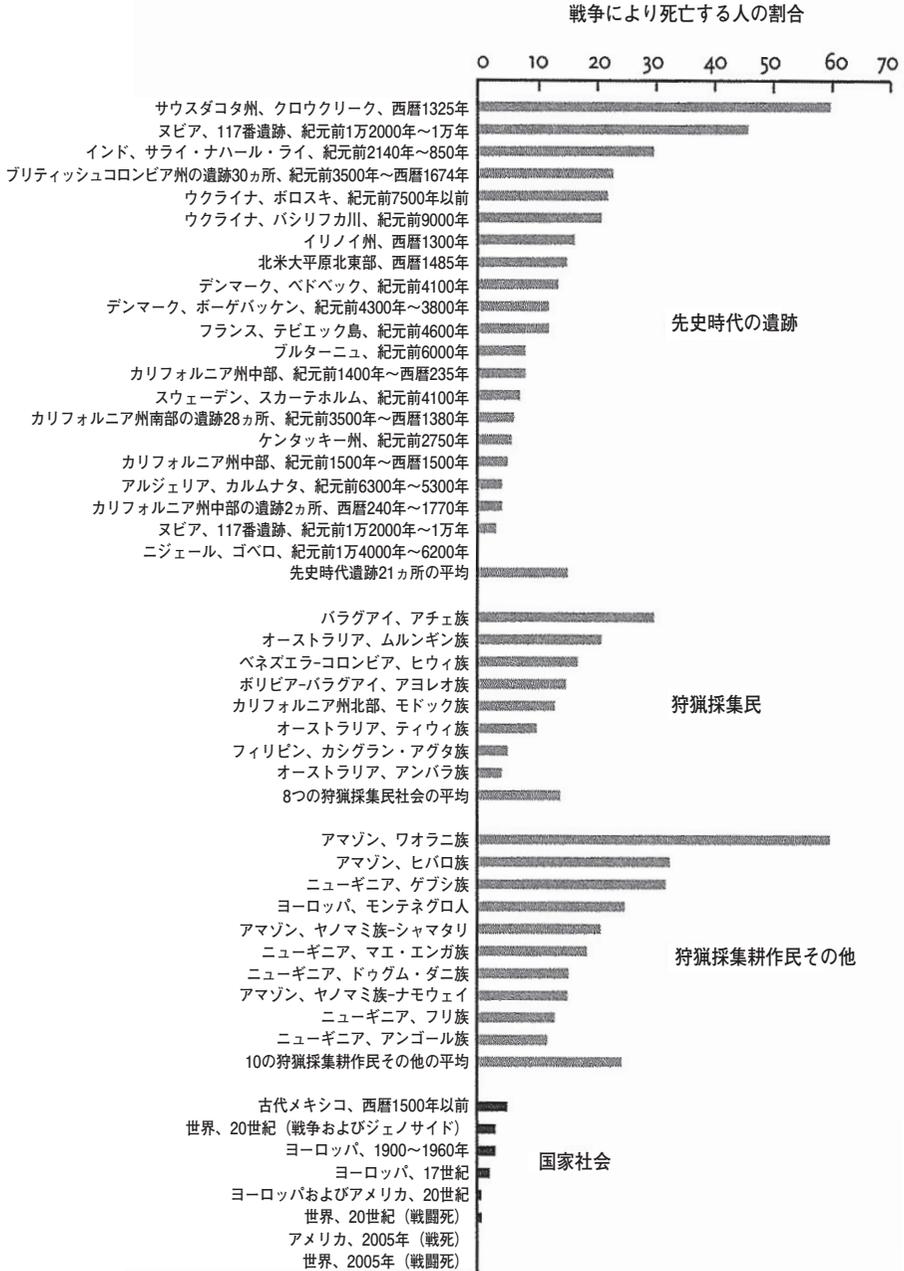


図1 非国家社会と国家社会の戦争により死亡する人の割合 (ピンカー2015より)

表1 縄文時代・弥生時代の出土人骨データと受傷人骨の比率（松本2017より）

縄文時代	総数	成人	受傷人骨	受傷人骨 (成人のみ)	成人*	受傷人骨*	受傷人骨 (成人のみ)*	受傷人骨 の比率	受傷人骨の 比率 (成人のみ)	受傷人骨の 比率 (成人のみ)*
早期	113	39	1	1	28	1	1	0.69%	2.56%	3.57%
前期	216	117	0	0	98	0	0	0.00%	0.00%	0.00%
中期	371	172	5	5	97	3	3	1.35%	2.91%	3.09%
後期	944	470	7	7	396	6	6	0.74%	1.49%	1.51%
晩期	932	471	10	10	430	9	9	1.07%	2.12%	2.09%
合計	2576	1269	23	23	1051	19	19	0.89%	1.81%	1.81%

縄文時代	総数	成人	受傷人骨	受傷人骨 (成人のみ)	成人*	受傷人骨*	受傷人骨 (成人のみ)*	受傷人骨 の比率	受傷人骨の 比率 (成人のみ)	受傷人骨の 比率 (成人のみ)*
早期	27	25	6	6	10	5	5	22.22%	24.00%	50.00%
前期	233	156	7	7	115	1	1	3.00%	4.49%	0.87%
中期	2347	1794	70	66	1541	53	49	2.98%	3.68%	3.18%
後期	691	420	17	17	270	15	15	2.46%	4.05%	5.56%
合計	3298	2395	100	96	1936	74	70	3.03%	4.01%	3.62%

\* 出土人骨数が10体未満の遺跡を除いたデータ  
 縄文時代早期：11000-7000年前，前期：7000-5300年前，中期：5300-4400年前，後期：4400-3300年前，  
 晩期：3300-2800年前。  
 弥生時代早期：2800-2600年前，前期：2600-2300年前，中期：2300-1900年前，後期：1900-1700年前。  
 出典：Nakao, et al 2016, Nakagawa et al. 2017.

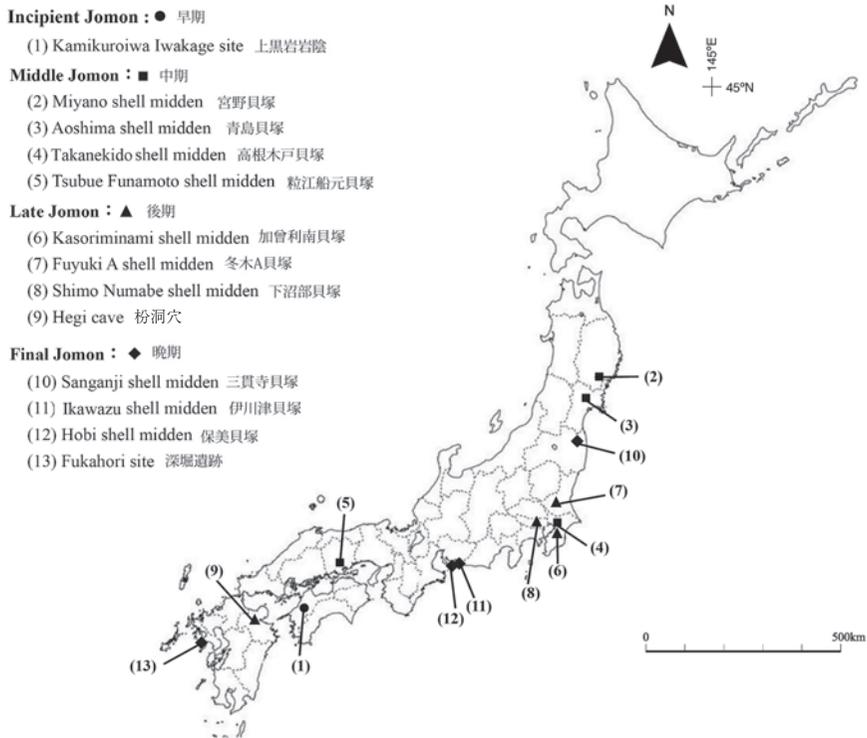


図2 縄文時代受傷人骨出土遺跡（Nakao et al. 2016より改変）

表2 縄文時代受傷人骨出土遺跡における内訳

時期	都道府県	遺跡名	受傷人骨	出土人骨	比率
早期	愛媛	上黒岩岩陰	1	28	3.60%
中期	岩手	宮野貝塚	1	3	33.30%
	宮城	青島貝塚	2	25	8.00%
	千葉	高根木戸	1	8	12.50%
	岡山	粒江船元	1	14	7.10%
後期	茨城	冬木A	1	12	8.30%
	千葉	加曾利南	1	22	4.50%
	東京	大沼部	1	1	100%
	大分	粉洞穴	4	18	22.20%
晩期	福島	三貫地	1	33	3.00%
	愛知	伊川津	7	83	8.40%
	愛知	保美貝塚	1	25	4%
	長崎	深堀遺跡	1	1	100%

表3 10体以上の人骨があり、受傷人骨の報告がない遺跡

時期	都道府県	遺跡名	出土人骨 個体数
早期	北海道	東釧路貝塚	19
中期	千葉	姥山貝塚	10
	千葉	加曾利北貝塚	13
	千葉	向谷貝塚	14
	千葉	草刈貝塚	45
	広島	太田貝塚	69
	岡山	里木貝塚	12
後期	北海道	コタン温泉遺跡	10
	北海道	美沢1遺跡	46
	宮城	田柄貝塚	13
	千葉	姥山貝塚	38
	千葉	貝の花貝塚	36
	千葉	宮本台	32
	千葉	祇園原貝塚	14
	千葉	権現原貝塚	28
	千葉	古作貝塚	40

栽培も行われていたとみられる(小畑2016)。その後、中期末には東日本一帯で遺跡の数・規模ともに減少がみられ、拠点集落の多くが放棄されるなど、社会的カタストロフィが起こる。特に、関東西部から中部地方にかけては、中期に著しい住居跡数の増加があった後、中期末から後期にかけて激減するという激しい変化が見られる(図3)。この急激な変化の要因については未解明なところが多いが、遺跡数・住居跡数の変動からすれば、更新世から完新世への転換期のナイル川流域と同じように、いったん増加した人口が資源不足に直面する事態が発生した可能性は高い。しかしながら、一つの遺跡で10体以上人骨が出土していて、なおかつ受傷人骨の報告がない遺跡は中期・後期にもかなりあり、こうした状況で集団間の暴力的衝突が発生したことは確認できない(表3)<sup>3)</sup>。このことは、人口増加、定住化、食料不足が必ずしも戦争の発生に直結しなかったことを示している。

報告された人骨資料を世界的に広く集めて、戦争の起源は人類史の初源に遡るとする説を検証しようという試みも進められている。紀元前1万年前より古い人骨資料のデータベースによる検討では、447遺跡のうち受傷人骨が出土したのは11遺跡、個体数にして2,605体中58体という結果が出ている<sup>4)</sup>。受傷率は約2%となり、縄文人骨のデータとほぼ一致している。遊動的なバンド社会に限れば集団的暴力はほとんど見られないこと、体系的にデータを集めるとそれほど高い受傷率とはならないことから、先史時代の狩猟採集社会で戦争が頻発していたとは考えられない

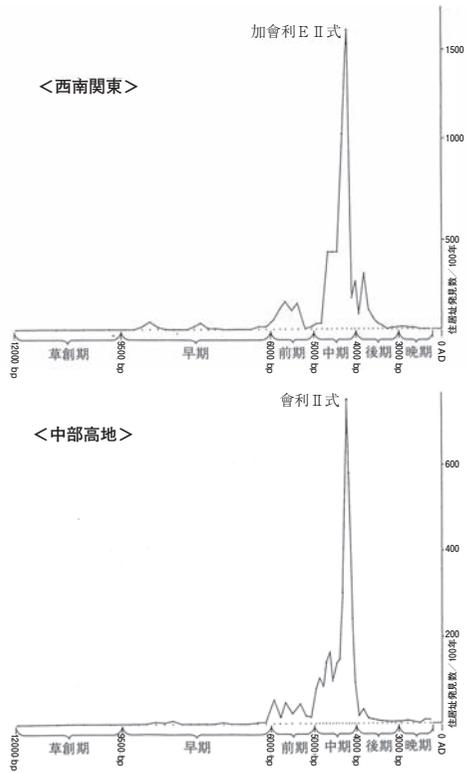


図3 関東西南部および中部高地における縄文時代竪穴住居跡数の変化(今村1997より)

(Fry 2013, Fry and Söderberg 2013, 中川・中尾2017)。そして、縄文社会においては、定住化や人口増加があっても、集団間の暴力の発生はほとんど起きなかったようである。

#### 4. 「平和」な社会の特徴と適応的理由

以上の議論から、やはり戦争は人類史の初源から頻発しているわけではなく、ある段階で発生し、拡大したとみるべきであろう。戦争を生む要因としては、農耕の開始、人口増加、食料不足、水不足などが注目されてきた。これらは、限られた資源の争奪という生物にとって普遍的な課題であり、戦争の重要な引き金になることは間違いない。しかし、組織化された集団間の暴力的対立である戦争は、食料不足などの問題解決のために一時的に採用される手段ではなく、特有の認知システムと社会的関係性の発達と不可分である。

世界中の民族誌の中からもっとも平和的と判断される5つの文化を選びだし、それらがどういう特徴を持っているかをリストにしたデヴィッド・ファブロによると、親族関係が社会を統合する重要な原理になっているような小規模な狩猟採集社会では、集団間の暴力的衝突がほとんどない事例がある(表4)。そうした社会では、子どもに対して厳しい躰をしないこと、社会の規範に個人を強制的に従わせるような強制組織がないこと、社会的な意思決定が特定の立場やジェンダーに偏らず、すべての大人が同等の発言権を持つ、という特徴を共有している(Fabro 1978)。上記の特徴は、いずれも個人間の権力の働きが極めて低い状況を示している。

マレー半島中部のセマイは、隣接する社会によって形成されている平和的システムの中の1つの集団である。警察や政府にあたる組織はなく、権威ではなく、世論と恥によって社会的統制が保たれている。争いは徹底した話し合いによって解決することになっており、その話し合いは双方の気が済むまで数日にわたって続けられることもあるという。子どもは無理に何かをさせられたり、罰せられたりする事がなく、また競争的な遊びもしない。生活においてパブリックとプライベートの区別がなく、男らしさに関心がない、という特徴がある。

セマイ社会においてもっとも重視されるのは友好関係、連携と、肉体的・感情的に世話をすること、栄養を与えて育てることである。また、食物の分配についての強い規範があり、食物を公平に分配することは当然のことであるため、受け取った人がお礼を言うことは、分配を拒否するのと同じくらい無礼なことだと考えられている(Dentan 1968・2008, Robarcheck 1977・1980, Miklikowska and Fry 2014)。さらに、意に沿わない提案に対しては「聞いてない」、「気分が乗らない」などの言い方でかわすなど、争いを避ける文化的慣習が存在する。

コンゴのムブティにおいても、支配的な集団、氏族、政治組織は存在せず、問題が起きれば火を囲んだ会議で男女ともに議論する。父系制社会であるが、狩猟採集活動は男女、子供が協力して行い、男女ともに子供の安全に気を配る。社会規範に対する違反や暴力行為があった場合は、軽蔑により罰せられる。こうしてみると、先に検討した道德の次元における公正とケアが重視されており、それに基づく社会的規範はB-Xタイプの権力によって維持されている社会であることが分かる。

ファブロの表(表4)には出てこないが、オーストラリアのマルドゥの事例を見ると、集団間の協力的関係を維持することと、食料を分配することが、資源をめぐる争うよりも狩猟採集社会においては適応的であることが分かる(Miklikowska and Fry 2010)。マルドゥは水が乏

表4 「平和的社会」の特徴 (Fabbro 1978より抜粋, 翻訳)

	セマイ マレー半島	シリオノ ボリビア	ムブティ コンゴ	クン カラハリ砂漠	コッパー・エスキモー カナダ極北地域
生業	狩猟採集, 焼畑	狩猟採集, 焼畑	狩猟採集	狩猟採集	狩猟 (採集も)
社会統合原理	親族・利害関係	親族・利害関係	親族・利害関係	親族・利害関係	親族・利害関係
社会化	寛容	寛容	寛容	寛容	寛容
強制組織	なし	なし	なし	なし	なし
社会階層	あり (男性に限らず)	なし	なし	あり (男性に限らず)	なし
決定権	全成人	全成人	全成人	全成人	全成人
社会的コントロール	たいてい超自然的	たいてい超自然的	たいてい超自然的	たいてい超自然的	超自然的・物理的
身体的暴力	稀, 致命的	稀, 致命的でない	稀, 致命的でない	稀, 致命的	多少, 致命的

しく過酷な環境で生活しているため、気候条件などにより、十分な水と食料が枯渇するリスクがある。そういう状況において、集団間の対立で社会的・領域的境界を強化することは自殺的である。宗教的・日常的物品の交換を通して協力的な親族関係を維持することによって、いざという時に助けをもらうことができる。親族システムは地域的バンドの領域を超えており、婚姻関係と毎年開催される集会によって友好的関係が維持されている。儀礼的なリーダーシップはあるが、他人を従わせる権威はなく、年齢・ジェンダーに基づく格差はあるが、特定の人物が集団の意思決定を支配することはできない。利己的でなく分け与えること、忍耐強く平等、愛、平和を求める自己超越的な価値が重視される。「戦争」や「確執」を表す言葉を持たず、問題は話し合いや距離を置いての怒鳴り合い、儀礼的交換によって解消される。

いざという時の相互扶助関係を確保することに加えて、利用可能なテリトリーを最大限広げるといっても、集団間の平和的關係を維持する方が適応的である。アンダマン島の事例では、隣接集団との関係が友好的であれば、平均16.4平方マイル(約42.5km<sup>2</sup>)のテリトリーが確保でき、45人のバンドを支えることができる。もし敵対的な関係になると、集団間の境界エリアでの活動が避けられるため、利用可能な領域は12平方マイル(約31.1km<sup>2</sup>)相当に縮小し、33人しか養えなくなる(Kelly 2005)。関東地方南西部の縄文時代中期中葉から後葉の長期的に継続する環状集落の分布について分析した谷口康浩は、これらが拠点集落であり、均等分布する傾向があることを示した(谷口2003)。ティーセン多角形から求めた領域面積は平均54.15km<sup>2</sup>となり、高い人口密度の中で近隣の集団との利害関係を調整しつつ効率的な資源利用をする必要があったと考えられる。

以上のような、「平和」な狩猟採集社会に共通して見られる特徴は、いつから存在しているのだろうか。メアリー・スタイナーは、イスラエルの遺跡で出土した動物骨の解体時についたカットマークの角度などを詳細に分析し、約40万年前には複数のヒトがよってたかって解体していたとみられるのに対し、20万年前になるとカットマークの角度のばらつきが低下することから、同じ人物が粛々と解体するようになったのではないかと考えている(Stiner et al. 2009)。これは、食料の均等分配を旨とする近年の狩猟採集民によく見られる、獲物を獲った人が自分で解体するのではなく、中立的な第三者に渡して切り分けてもらうというような行為が、このころから始まった可能性を示唆している。

## 5. 集団間の暴力を促進／抑制する諸要因

戦争を促進／抑制する要因について明らかにするためには、環境、生業、人口などの経済的要因だけでなく、文化的な要因も視野に入れて検討する必要がある。狩猟採集社会において戦争が少ない理由は、平等主義、分配の重視、自主性の尊重、そして血縁関係を越えた相互扶助や寛大さの尊重という狩猟採集民に共通して見られる文化的特徴が密接に関与していると考えられる（図4）。

遊動的狩猟採集民のキャンプには、「自分」からみて親戚でもなんでもない人がかなりいるという実態があり、こうした状況が人間の著しい協調性と文化の蓄積を進化させたとみられる（Hill et al. 2011, Dyble et al. 2015）。キャンプ内の血縁者率が下がる原因は、「誰と住むか」の判断に男女が同等に関わるためであることが、民族調査とエージェント・ベース・シミュレーションによって示されている。つまり、人類の進化の過程で、ペア形成と性平等が人類特有の社会組織（双系的血縁関係、兄弟姉妹関係の継続、姻戚関係の重視、「他人」との共生）を生み出し、その中で平等主義と非血縁者への寛大さが養成されたということである。

狩猟採集民は、強制的な教育や指導ではなく、遊びや観察、模倣を通してこうした社会的・文化的規範を習得していることが分かってきている（Lew-Levy et al. 2017）。自主性の尊重と集団の協調は一見両立が難しそうであるが、暴力や競争を避けるべきという倫理的義務によってバランスが保たれている。

また、多くの狩猟採集社会において、ジェンダーに基づく分業が自主性と協力関係の維持に役立っているとされるが、性役割分業は必ずしも厳密ではなく、自然環境や技術などの要因によって多様である。狩猟採集社会では6～8歳になるまでは男女で遊び方や仕事の内容にほとんど差がない。性による差異が統計的に認められる身体的・認知的能力もあるが、その分布は重なりが大きいので、ジェンダーに基づく強制的な教育が行われない状況においては、状況や個性に応じた多様性が生じるのだろう。狩猟採集民でも、定住するとより早い段階から男女の差が生まれ、農民と類似してくることが知られているが、なぜ定住化するとジェンダー規範が厳しくなり、学習が模倣中心から教育主体になるのかはよく分かっていない（Lew-Levy et al. 2017）。

権力の行使、すなわち力による他者のコントロールを是とするイデオロギーの主流化が、戦争を可能にするとともに、社会の階層化も促すと考えられる。日本列島へも水稻農耕と共に武器が導入されている。物理的な力によって他者の行動をコントロールしてよいという思考の初

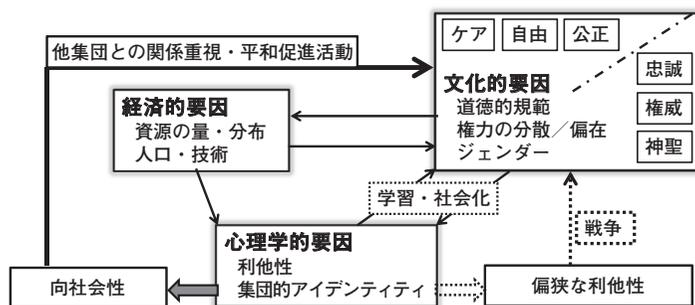


図4 集団間の暴力を促進／抑制する諸要因の関係

源的な兆候は、ジェンダー間の不平等としてあらわれるという視点は、考古学的分析にとって重要である。縄文時代においてはジェンダーにまつわる象徴的活動は活発であるが、男女の格差はほとんど認められない（松本2008a）。弥生時代以

降のジェンダー関係の変化が、集団間暴力の発生とどのように関連しているかが重要な検討課題となる（設楽2007, 松本2008b）。民族誌に基づく分析からも、狩猟採集社会に比べて農耕牧畜社会の方が、戦う男性が社会的に尊敬される比率が高いことが示されており、農耕牧畜社会において男性間の競争が激しくなったことを示唆している（Apostolou 2017）。

心理学的な要因として、ヒトには生まれつき見境のない利他性が認められるが、社会化をとおして社会的規範の影響を強く受け、利他的行動の対象が選択的になる（トマセロ2013）。自集団と他集団を区別する社会的認知の発達に関わる学習がここでも重要となる。他集団は資源をめぐる暴力的競争相手であり、脅威であるとする見方は、戦争を人間の本性とする考え方の基盤としてしばしば主張される場所である（ガット2012, ダイヤモンド2015他）。しかし、他集団と積極的にネットワークを構築することは、チンパンジーとは異なるヒトの特徴であり、特に食料を備蓄しない狩猟採集社会においては重要なリスク緩衝メカニズムになっている。

戦争を可能にするのは他集団の成員に対して自集団とは全く異なる評価・行動パターンをとる「偏狭な利他性」であるが、その程度は集団により異なっている（Hruschka and Henrich 2013）。集団的アイデンティティ形成は、コスト・ベネフィットの判断によってかなり影響を受け、資源の分布状況や変動によって相互に利があると判断される場合には、他集団とのパートナー関係が積極的に模索される（Barth 1969, 松本2002b, Pisor and Gurven 2016）。そうした状況で生じる他集団に属する人を高く評価するという傾向は、集団内関係も強化し、大規模な協力行動を促進したり、偏狭な行動を抑制したりすることにつながると考えられる（Pisor and Gurven 2015）。

つまり、利他性や集団的アイデンティティといった心理学的要因は普遍的に存在しているが、ケア、自由、公正を尊重する文化的価値を共有し、権力の集中やジェンダー格差の無い社会においては、学習・社会化によって血縁関係や集団を超えた向社会性が発達し、他集団との平和的關係を促進する活動を通してさらに道徳的規範が強化されるという関係が成立する（図4）。このシステムにおいては、それを脅かす暴力や偏狭さ、利己的態度は強力に排除されるのであるが、重視される道徳次元がいったん忠誠、権威、神聖に傾き、偏狭な利他性が文化的に強化されると、集団間関係のあり方として戦争が当然の選択肢となってしまう。集団間の暴力的対立によって偏狭な利他性、それを支える忠誠や権威を重視する道徳的規範の間に相互強化的サイクルができると、それを崩すことは容易ではない。

人類史においてかつては主流であったはずの平等・平和主義システムが、どのようにして崩されるのか。経済的要因はおそらく重要であるが、それがいかにして倫理的規範や権力のあり方を変えるのか、人類史的な課題として追及する必要がある。狩猟採集経済を基盤としながら定住性・人口密度の上昇も見られる縄文時代は、これらの要因間関係を考える上で重要である。縄文時代後期から晩期にかけて、東日本に由来する技術や人工物が西日本に拡散すること、ヒスイや東日本系の土器・石器類が拠点的遺跡で出土することについて、脱平等社会の動態としてとらえてきたが（松本2002a）、こうした視点からも再検討する必要があると考えている。

## 注

1) 重視する道徳の次元の違いが政治的立場の分断の基礎にあるとするハイトの分析は、ある程度本質について

- いるように思われる。また、保守派の方が重視する道徳の次元が多いこと、複雑で大規模な社会では忠誠と権威がしばしば文化的に高く評価されることが、保守派の勢力の強さの理由であると考えられる。
- 2) ケニアのナタルクで約一万年前の27体の人骨が発見され、うち10体が暴力的に殺されていたという事例も、先史時代の狩猟採集民が戦争をしていた証拠として注目された (Mirazón et.al. 2016)。
- 3) 人骨の遺存率は土壌の性質に大きく左右され、日本列島においては貝塚や砂丘、洞穴などを除くと良好な人骨資料は極めて限られるため。受傷率の解釈は慎重を期す必要がある。さらに、受傷状況が認定・報告されるかどうか、資料の状態や報告者の視点等に左右されることから、各遺跡の人骨の状態を精査する必要がある。
- 4) Piscitelli, M. and Kissel, M. Evidence of Interpersonal Violence in Pleistocene Populations: Introducing a New Skeletal Database of Modern Humans to Test Theories on the Origins of Warfare. 80th Annual Meeting of the Society for American Archaeology. Austin, Tx. (file:///C:/Users/owner/Dropbox/%E8%80%83%E7%A0%94%E7%A9%B6%E9%9B%86%E4%BC%9A2018/Evidence\_of Interpersonal\_Violence\_in\_Pl.pdf)

## 引用文献

- 今村啓爾 1997「縄文時代の住居址数と人口の変動」『住の考古学』同成社
- 小畑博己 2016『タネまく縄文人—最新科学が覆す農耕の起源』吉川弘文館
- 佐原 真 1986「家畜・奴隷・王墓・戦争」『歴史科学』103, 1-17頁
- 佐原 真 1999「日本・世界の戦争の起源」『戦いの進化と国家の形成』東洋書林
- 佐原 真 2005『戦争の考古学』岩波書店
- ガット, アザー 2012『文明と戦争』中央公論新社
- 設楽博己 2007「弥生時代の男女像—日本先史時代における男女の社会的関係とその変化—」『考古学雑誌』第91巻第2号, 32-82頁
- ダイヤモンド, ジャレド 2015 レベッカ・ステフォフ編著『若い読者のための第三のチンパンジー：人間という動物の進化と未来』秋山勝訳, 草思社
- 谷口康浩 2003「縄文時代中期における拠点集落の分布と領域モデル」『考古学研究』第49巻第4号, 39-58頁
- ドゥ・ヴァール, フランス 1998『利己的なサル, 他人を思いやるサル—モラルはなぜ生まれたのか』西田利貞訳, 草思社
- トマセロ, マイケル 2013『ヒトはなぜ協力するのか』勁草書房
- 中川朋美・中尾 央 2017「人骨から見た暴力と戦争—国外での議論を中心に—」『日本考古学』第44号, 65-77頁
- ピンカー, スティーブ 2015『暴力の人類史』青土社
- ボーム, クリストファー 2014『モラルの起源—道徳, 良心, 利他行動はどのように進化したのか』斎藤隆央訳, 白揚社
- 松本直子 2002a「伝統と変革に揺れる社会—後・晩期の九州—」安斎正人編『縄文社会論(下)』103-138頁 同成社
- 松本直子 2002b「縄文・弥生変革とエスニシティ」『考古学研究』第48巻第2号 24-41頁
- 松本直子 2008a「ジェンダー」小杉 康・谷口康弘・西田泰民・水之江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学 10 人と社会—人骨情報と社会組織—』133-144頁 同成社
- 松本直子 2008b「男女関係の変化とその背景」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『弥生時代の考古学 7 儀礼と権力』169-182頁 同成社
- 松本直子 2017「人類史における戦争の位置づけ」『現代思想』45(12) 162-174頁
- 溝口孝司 1999「権力」安斎正人編『用語解説 現代考古学の方法と理論 I』35-40頁
- Apostolou, M. 2017. Implications of the Neolithic Revolution for Male-Male Competition and Violent Conflict. *Mankind Quarterly* 58(2): 208-228.
- Barkow, J., Cosmides, L. and Tooby, J., (eds.) 1992. *The adapted mind: Evolutionary psychology and the generation of culture*. New York: Oxford University Press.
- Barth, F. 1969. *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*. Little, Brown.

- Bowles, S. 2009. Did warfare among ancestral hunter-gatherers affect the evolution of human social behaviors? *Science*, 324, 1293-1298.
- Dentan, R. K. 1968. *The Semai: Nonviolent people of Malaya*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Dentan, R. K. 2008. Overwhelming terror: Love, fear, peace, and violence among Semai of Malaysia. Lanham, MD: Rowman & Littlefield.
- Dyble, M., Salali, G. D., Chaudhary, N., Page, A., Smith, D., Thompson, J., Vinicius, L., Mace, R. and Migliano, A.B. 2015. Sex equality can explain the unique social structure of hunter-gatherer bands. *Science*, vol. 348, Issue 6236, 796-798.
- Fabbro, D. 1978. Peaceful societies: An introduction. *Journal of Peace Research* 15(1), 67-83.
- Friedman, R. 2014. Violence and climate change in prehistoric Egypt and Sudan. *British Museum blog*. (<https://blog.britishmuseum.org/violence-and-climate-change-in-prehistoric-egypt-and-sudan/>)
- Fry, D.P. (ed.) 2013. *War, Peace and Human Nature: The Convergence of Evolutionary and Cultural Views*. Oxford University Press.
- Fry, D.P. and Soöderberg, P. 2013. Lethal aggression in mobile forager bands and implications for the origin of war. *Science* 341: 270-273.
- Haidt, J. (2012). *The righteous Mind: Why good people are divided by politics and religion*. Pantheon. (ジョナサン・ハイト, 高橋洋訳 2013『社会はなぜ左と右にわかれるのか—対立を超えるための道徳心理学』紀伊国屋書店)
- Hill, K.R., Walker, R.S., Božičević, M., Eder, J., Headland, T., Hewlett, B., Huatado, A.M., Marlowe, F., Wiessner, p. and Wood, B. 2011. Co-Residence Patterns in Hunter-Gatherer Societies Show Unique Human Social Structure. *Science*, vol. 331, Issue 6022, 1286-1289.
- Hruschka, D.J. and Henrich, J. 2013. Economic and evolutionary hypotheses for cross-population variation in parochialism. *Frontiers in Human Neuroscience* 7, 559, 1-10.
- Keeley, L.H. 1996 *War before civilization*. New York: Oxford University Press.
- Kelly, R. C. 2000. *Warless Societies and the Origin of War*. University of Michigan Press.
- Kelly, R. C. 2005. The evolution of lethal intergroup violence. *PNAS*, vol. 102(43), 15294-15298.
- Lew-Levy, S., Lavi, N., Reckin, R., Cristobal-Azkarate, J., and Ellis-Davies, K. 2017. How do hunter-gatherer children learn social and gender norms? A meta-ethnographic review. *Cross Cultural Research* 52(2), 213-255.
- Malešević, S. 2017. *The Rise of Organised Brutality: A Historical Sociology of Violence*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Malešević, S. 2018. War. In G. Ritzer and C. Rojek (eds.), *The Blackwell Encyclopedia of Sociology*. New York: Wiley. DOI: 10.1002/9781405165518.wbiegw001.
- Miklikowska, M.G. and Fry, D.P. 2010. Values for peace: Ethnographic lessons from the Semai of Malaysia and the Mardu of Australia. *Beliefs and Value*, vol. 2, 124-137.
- Mirazón, L.M., Rivera, F., Power, R.K., Mounier, A., Copsey, B., Crivellaro, F., Edung, J. E., Fernandez, J., Maillo, N., Kiarie, C., Lawrence, J., Leakey, A., Mbua, E., Miller, H., Muigai, A., Mukhongo, D.M., Van Baelen, A., Wood, R., Schwenninger, J.-L., Grün, R., Achyuthan, H., Wilshaw, A. and Foley, R.A. 2016. Inter-group violence among early Holocene hunter-gatherers of West Turkana, Kenya. *Nature*. 529(7586), 394-398.
- Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Nakagawa, T., Matsumoto, N. and Matsugi, T. 2016. Violence in the prehistoric period of Japan: The spatiotemporal pattern of skeletal evidence for violence in the Jomon period. *Biology Letters*, 12(3), 20160028.
- Nakagawa, T., Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Matsumoto, N. and Matsugi, T. 2017. Violence and warfare in prehistoric Japan. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 8(1), 20170412.
- Pisor, A.C. and Gurven, M. 2015. Corruption and the Other(s): Scope of Superordinate Identity Matters for Corruption Permissibility. *PLoS One* 10, e0144542.

- Pisor, A.C. and Gurven, M. 2016. Risk buffering and resource access shape valuation of out-group strangers. *Scientific Reports* 6, 30435, DOI: 10.1038/srep30435.
- Robarchek C. A. 1977. Frustration, aggression, and the nonviolent Semai. *American Ethnologist*, 4(4), 762-779.
- Singer, J. D. and Small, M. 1972. Wages of War, 1816-1965: A Statistical Handbook. New York: John Wiley & Sons Ins.
- Stiner, M., Barkai, R. and Gopher, A. 2009. Cooperative hunting and meat sharing 400-200 kya at Qesem cave, Israel. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 106, 13207-13212.
- Tooby, J. and Cosmides, L. 2005. Evolutionary psychology: Conceptual foundations. In D. M. Buss (ed.), *Evolutionary Psychology Handbook*. New York: Wiley.
- Wiessner, P. 2005. Norm enforcement among the Ju/'hoansi bushmen: A case of strong reciprocity? *Human Nature* 16, 115-145.

## Warfare among hunter-gatherer societies: Considering promoting/preventive factors of inter-group violence

NAOKO Matsumoto

**Abstract:** The aim of this paper is to discuss the factors which promote or prevent warfare through an examination of current arguments over the origin of warfare and archaeological data. Warfare is a social behavior which develops on the basis of moral standards that value parochial altruism, loyalty to the group and its leader, and obedience to authority. While physical attack can be observed among many species, only humans conduct warfare because morality is a human universal. Contrary to the currently popular understanding that the origin of warfare goes back to the beginning of human history, systematic examination of the rate of violence seen in skeletal remains indicates that warfare was not prevalent among prehistoric hunter-gatherer societies. Moral values promoting egalitarianism, sharing, autonomy, mutual aid, and unrestricted generosity, which are effectively maintained among peaceful hunter-gatherer societies through mutual monitoring and the power of reputation, prevent the concentration of power and inter-group violence. These cultural/cognitive tendencies evolved among prehistoric foragers as the promotion of peaceful relationships beyond the kinship-level was more positively adaptive.

**Keywords:** Origin of warfare; egalitarianism; power; parochial altruism; gender.